

桃太郎説話の元となった「温羅」伝説

おかやま物語 http://www.pref.okayama.jp/doboku/doken/monogatari nomi chi/ura/ura_top.htm

総社市 鬼ノ城 <http://www.city.soja.okayama.jp/kanko/kankochi/kinojo.jsp>

吉備津神社 & 吉備津彦神社 <http://kibitujinja.com/> & <http://www.kibitsu hiko.or.jp/main10.htm>

などの home page より整理転記



岡山市西部と総社市東部にまたがる地帯では、昔から桃太郎伝説のルーツともいべき吉備津彦命の鬼退治にまつわる「温羅（うら）伝説」が語り伝えられている。

総社市鬼の城山にある古代山城・鬼ノ城と、奈良時代に出来た日本最古の歴史書『古事記』・『日本書紀』に見える吉備津彦命が、大和朝廷の命を受けて吉備平定に向かう記述が基になっている。

第11代垂仁天皇（4～5世紀、古墳時代）のころ、異国の鬼神が飛行して吉備国にやって来た。彼は百済の王子で温羅といい、足守川の西の方の新山に城を築き、その傍の②岩屋寺に楯を構えた。温羅の姿は恐ろしく、両目はらんらんして虎や狼のごとく、ぼうぼうたるひげは赤く燃えているようであった。さらに身長は一丈四尺もあり極めて狂暴であった。そして遠くを航行する船を襲っては財物や婦女子を略奪し、乗っていた人を釜ゆでにしていたという（③鬼の釜）。人々はこの山を①鬼ノ城と呼ぶようになった。

そこで朝廷は、その温羅を平定するために吉備津彦命を派遣することになり、吉備津彦命はまず吉備の中山に陣を構え（⑦吉備津神社 ⑧吉備津彦神社）、西には石の楯を築いた（⑤楯築遺跡）。一方 温羅は鬼ノ城に陣取る。



戦いが始まると矢合戦になったが、温羅は強く、双方の矢が空中で噛み合っ落ちてしまった（④矢喰宮）。そこで吉備津彦命は2本の矢を一緒に発射したところ、一矢は温羅の目にあって沢山の血が流れ血吸川（ちすいがわ）となり、浜は真っ赤に染まった（赤浜）。温羅は雉（きじ）となって逃げたが、吉備津彦命は鷹（たか）となって追った。今度は、温羅は鯉となって血吸川に逃げたので、吉備津彦命は鵜となって温羅をくわえ、ついに首をはねた（⑥鯉喰神社）その首は串に刺してさらされた（⑨白山神社）。

しかし首は何年も吠え続けたので、犬飼武命に命じて犬に食わしたが、まだ吠え続けたのである。このため吉備津彦命は吉備津神社の「御釜殿」の下に埋めたが、13年間も唸り続けたという。

ある夜吉備津彦命の夢に温羅が現れ、「わが妻・阿曾媛にお釜殿の火を炊かせば釜を喰らせてこの釜で世の吉凶を占おう」といった。命はそのお告げの通りにすると、唸り声も治まり平和が訪れた。

これが現在も続く吉備津神社に伝わる「鳴釜神事」の起源で、その後、吉備国の統治にあたった吉備津彦命は、晩年、吉備の中山の麓の茅葺宮に住居を構え、281歳の長寿をまっとうした。

【参考文献】 [あるく岡山桃太郎伝説の旅（岡山市・岡山市観光協会）](#)・[岡山三市を結ぶ歴史ロマン主人公ゆかりの地をたずねる旅](#)・[図説岡山県の歴史](#)・[吉備津彦命の鬼退治](#)・[博学紀行岡山県](#)



古代にはこの伝承の舞台となった吉備の中山周辺は海岸線に近く、小高い吉備の中山は神体山と仰がれる。温羅一族を滅ぼした後 吉備津彦は備中山の麓に茅葺宮を造って住み、吉備を治め、281歳で亡くなり、中山山頂部にに葬られたという。吉備の中山の山上にある御陵はこの吉備津彦命の墓と伝えられ、宮内庁が管理している。現在、この吉備の中山の北東山麓と北西山麓に同じ吉備津彦命を祭神とする吉備津彦神社と吉備津神社があるが、いずれの社伝にも吉備津彦の屋敷跡に社殿を造営して吉備津彦を祀ったのが始まりと伝える。

このように二つの神社が近接してあるのは、大化改新の後 吉備国がこの吉備の中山を境とする備前・備中と備後に3分割された時に、吉備津神社がそれぞれの国の守り神として分社され、それぞれが国の一宮として信仰を集めてきたためである。

また、吉備津神社の釜殿で今に続く「鳴釜神事」このは神官と阿曾女と二人で執り行う神事。

阿曾女というお婆さんは温羅が寵愛した女性と云われているが、鬼の城の麓に阿曾の郷があり代々この阿曾の郷の娘が奉仕しているという。

阿曾女が釜に水をはり湯を沸かし釜の上にはセイロがのせてあり、常にそのセイロからは湯気があがっている。

神事が始まると祈願した神札を竈の前に祀り、阿曾女は神官と竈を挟んで向かい合って座り、神官が祝詞を奏上する頃、セイロの中で器にいれた玄米を振ると鬼の唸るような音が鳴り響き、祝詞奏上し終わるころには音が止むという。

この釜からでる音の大小長短により吉凶禍福を判断しますが、そのお答えについては奉仕した神官も阿曾女も何も言わず、自分の心でその音を感じて判断するという。また、この阿曾の郷は昔より鑄物の盛んな村で、お釜殿の大きな釜が壊れたり古くなって交換するのはこの阿曾の郷の鑄物師の役目であり特権でもあった。



この温羅の城「鬼ノ城」の東直下に広がる阿曾の郷の谷間は古代「真金吹く吉備の中山」と歌われた吉備の大製鉄地帯（奥坂製鉄遺跡群）で、今はゴルフ場の池の底になっているが、日本最古 6 世紀の製鉄炉が見つかった千引かなくろ谷製鉄遺跡などが眠っている。

この鬼ノ城・阿曾の郷を中心とした温羅伝説はこの地帯に渡来した製鉄集団の話と言われ、吉備の鉄の支配を目指した大和側の話とする説が一般的である。

一方、岡山では「この温羅一族が鉄器で武器と農工具を作り吉備を開拓して国を豊かにした」とする民間伝承が語り継がれている。「桃太郎が鬼を成敗した」とする大和が作り出した説話とともに民衆にとっては吉備の国に豊かさを作り出した温羅は「鬼」ではなく、親しみのある「吉備の開拓神」とする解釈が「もうひとつの桃太郎」として広く語られるようになってきた。

「真金吹く吉備の中山」と歌われ、古代の製鉄地帯吉備を象徴する吉備の中山。そして、鬼ノ城直下 血吸川が流れ下る谷あいには製鉄集団がいて、製鉄を行っていた阿曾の郷。豊かな吉備の地を攻めて、鉄と国を大和の支配化に組み入れたのが吉備津彦であり、そんな古代伝承の痕跡が色々残っている。



古代の正規の歴史書には登場せず、未知の部分が多い鬼ノ城は7世紀の巨大な朝鮮式の山城。

すり鉢を伏せたような形の山で、斜面は急峻だが頂部は平坦である。この山の八合目から九合目にかけて、城壁が2.8kmにわたって鉢巻状に巡っている。温羅の伝承は4・5世紀頃の伝承が元と考えられているで、直接的にはずれている。

城壁は、一段一列に並べ置いた列石の上に、土を少しづつ入れてつき固めた版築土塁で、平均幅約7m、推定高は約6mもある。

要所には堅固な高い石垣を築いており、その威圧感は天然要害

の地であることとあわせ、圧倒的な迫力をもっている。このように、版築土塁や高い石垣で築かれた城壁は、数m～数十mの直線を単位とし、地形に応じて城内外へ「折れ」ていることに特徴がある。



城壁で囲まれた城内は比較的平坦で約30ヘクタールという広大なもので、出入り口となる城門が4ヶ所にあり、4つの谷を含んで山の周囲を取り囲んでいるため、谷部には排水の必要から水門が6ヶ所に設けられている。城内には、食品貯蔵庫と考えられる礎石建物跡や狼煙場、溜井（水汲み場）もある。この他に城内には貯水池とみられる湿地が数ヶ所ある。

さらに兵舎、各種の作業場なども予測されるが未発見である。

昨年 12 月 すぐ下に 古代の製鉄地帯をすぐ下に見降ろす鬼ノ城東門の上の尾根筋から鍛冶炉を伴う鍛冶工房跡が発掘され、鬼ノ城内で大規模に武器を作って、備えていたことがわかってきた。

百濟再興のため、朝鮮に兵を送った日本が、663年の白村江の戦いで敗北。唐・新羅連合軍が本土に侵攻するのではないかと危機感を抱いて、西日本各地に築かせた古代山城の一つであるという説に信憑性を帯びてきたといえる。

古代の山城 鬼ノ城で鍛冶炉跡6基が出土、大規模にこの山城で鉄器生産か

7世紀後半 663年 朝鮮半島白村江の戦いで敗北から、唐・新羅の連合軍の本土侵攻する備えか

岡山県古代吉備文化センター ホームページ ほかより <http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kinojou-top.html>

2009. 12. 26. by Mutsu Nakanishi

桃太郎説話や「温羅伝説」の舞台として、古くから親しまれてきた鬼ノ城。

その築城目的は、663年の白村江の戦いにおける敗北から、唐・新羅の連合軍が本土に侵攻するのではないかと危機感を抱いた当時の政権が、西日本各地に築かせた古代山城の一つであるという説がよく知られている。しかし『日本書紀』などには一切登場せず、築かれた時期についても様々な説があり、未だ多くの謎に包まれた遺跡である。



昭和53（1978）年の鬼ノ城学術調査団による調査、さらに平成6（1994）年からの総社市教育委員会による発掘調査が行われ、角楼（かくろう）や城門など、城の外郭（がいかく＝外側）の壮大な姿が次々と明らかになりました。

城内については、平成11（1999）年に岡山県古代吉備文化センターが確認調査を行い、礎石建物群の様相や鍛冶関連の遺構の存在が明らかになりました。今回は、前回の確認調査で得られた成果をもとに、より広い調査区を設定し、平成18（2006）年度から7か年計画で調査に取り組んでいる。

■ 調査位置図（H21年度）



総社・鬼ノ城に鍛冶工房ゾーン確認 遺構2カ所目 鉄滓など出土

古代山城・鬼ノ城（国指定史跡、総社市奥坂）で岡山県古代吉備文化財センターが進めている発掘調査で1日までに、同城内2カ所目となる鍛冶（かじ）工房の跡が確認された。鉄の不純物・鉄滓（てっさい）が大量に出土、炉壁や鉄器の一部も見つかっており、鉄器の生産・補修が行われていたとみられる。以前に見つかった鍛冶工房跡と近く、一帯に工房ゾーンが広がっていた裏付けになると注目を集めている。

鍛冶工房跡が見つかったのは、東門跡から西に約180メートル入った尾根上で、直径1・5メートルの範囲から関連遺物や熱を受けて焼けた岩が集中して出土した。炉壁は幅11センチ、高さ9センチの粘土質で熱を受け表面が黒く溶けている。鉄器片は5ミリ四方の板状で器種は不明。鉄滓は約200点で、大きい物は1辺10センチ以上ある。

古代山城に詳しい亀田修一岡山理科大教授（考古学）は「全国の古代山城で鍛冶工房が確認されているのは鬼ノ城だけで、機能を把握する重要な手掛かりとなる。何を作っていたか知るため今後は製品の出土が期待される」と話している。

鬼ノ城で鍛冶炉跡6基が出土、大規模に鉄器生産か

全国の古代山城で唯一、鉄器にかかわる鍛冶（かじ）工房跡が確認されている鬼ノ城（国史跡、総社市奥坂）の発掘調査で28日までに、新たに計6基の鍛冶炉跡が出土した。当時の官営工房に通じる技術も確認され、必要とする鉄器を城内で供給できる大規模な生産体制を持っていた可能性が高まった。

岡山県古代吉備文化財センターが7月から、東門跡近くの谷部を発掘調査。9月初旬には鍛冶の際に出る鉄の不純物・鉄滓（てっさい）などが見つかり、谷部一帯に鍛冶工房ゾーンが広がるとみられていた。

鍛冶炉跡は、3カ所の調査区（計1350平方メートル）すべてから出土。地面に穴を掘り、内側に粘土を張った構造で、最大で直径30センチ、深さ8センチ。高温を受けて炉壁は赤く焼け締まり、一部には鉄滓が付着していた。伴った須恵器（すえき）からいずれも7世紀後半とみられる。



鬼ノ城で新たに見つかった鍛冶炉跡



【鬼ノ城 鍛冶工房跡で発掘された鍛冶遺物の展示】

甦る!古代吉備の国
謎の鬼ノ城

調査成果速報


岡山県古代吉備文化財センター
 では、平成18年度から総社市奥城
 にある鬼ノ城の調査を行っています。
 今年度は城内の南東部で調査を行い、
 古代山城としては初となる計11基の鍛
 冶炉が発見されました。



鍛冶炉と鉄滓・羽口

今回の調査で見つかった鍛冶炉の
 周りからは、鍛冶作業に伴う鉄滓や鞆
 の先に付ける羽口が見つっています。
 また、鉄を鍛えた際に飛び散った鉄の
 破片もたくさん出土しました。

鉄滓とは鉄を熱して溶かし加工する
 際に出る不純物のことです。調査では
 大きな鉄滓がたくさん出土したことか
 ら、簡単な修理作業だけではなく、釘
 や楔、武器で
 ある鐵の製作
 なども行われ
 ていたことが
 考えられます。



鍛冶作業の想像図



鉄滓 鍛冶炉



羽口



発掘の様子



羽口の残る鍛冶炉

吉備古代文化財センターに展示されていた鬼ノ城 鍛冶工房跡で発掘された遺物 2010.1.15.

岡山県立吉備古代文化財センターにて 2010.1.15.



2009年10月1日(木) 調査のきっかけ

「ここを掘ったら出る、というのがどうして分かるの？」私たちがよく受ける質問です。

9月下旬から新たに発掘を開始したこの地点は、地表に落ちていた1点の遺物が調査のきっかけになりました。

これは、鍛冶炉の火力を上げるために風を送る吹子(ふいご)という装置の一部で、送風口にあたる部分です。前の調査区に引き続き、ここでも鍛冶工房が出てくるのか、それともハズレなのか、掘ってみないと分かりません。(M)



2009年10月9日(金) 無数の鉄滓

鉄滓というのは、鍛冶作業を行った時にできる鉄の不純物のかたまり。

調査を始めて間もなく、無数の鉄滓が出土し始めました。

写真の白い札はその位置を示しています。

この付近にも鍛冶工房があったことは確実なようです。(M)



2009年10月14日(水) 突然の雨に・・・

現在の調査地点は、城内でも東端部にあり、駐車場から歩いて約30分の距離。

雨が降り出したからといって雨の中を下山するのも大変です。

急ぎ現場にブルーシートを張り、突然の雨と雷をやり過ごすことに。

日没も近づき、暗い山の中で途方にくれる面々でした。(M)



2009年10月21日(水) 待望の鍛冶炉！

吹子(ふいご)の一部や鉄滓がたくさん出土し、ここに鍛冶工房があったであろう状況証拠は出揃っていましたが、ついに、待望の鍛冶炉を発見！

直径約30cm、お椀形に地面を掘りくぼめた炉で、真っ赤に焼けています。

まさにこの場所で鉄を加熱し、鉄製品を作っていたのです。調査参加者一同、感激の瞬間でした。(M)



2009年10月29日(木) またまた鍛冶炉！

前回紹介した鍛冶炉から数m離れた所で、2つ目の鍛冶炉を発見しました。

少なくとも2つの鍛冶炉を備え、鉄滓などの量も多く、どうやら想像していたよりも本格的な鍛冶工房のようです。

わずかに1点の遺物を拾ったところからスタートした調査地点でしたが、予想以上の成果が上がりました。(M)



2009年11月6日(金) 今度は何が？

調査期間もあと2か月を切り、いよいよ今年最後の調査区で発掘作業が始まりました。ここでは10年前の確認調査で「竪穴遺構」が見つかり、鉄滓やふいご羽口などが出土していて、鉄器を製作した鍛冶場だったと考えられています。

今回の調査は、この竪穴周辺を精査し、鍛冶作業の様子を解明するのが目的です。まだ旧トレンチを再掘削している段階ですが、今度はどんな発見が飛び出すか楽しみです。(O)

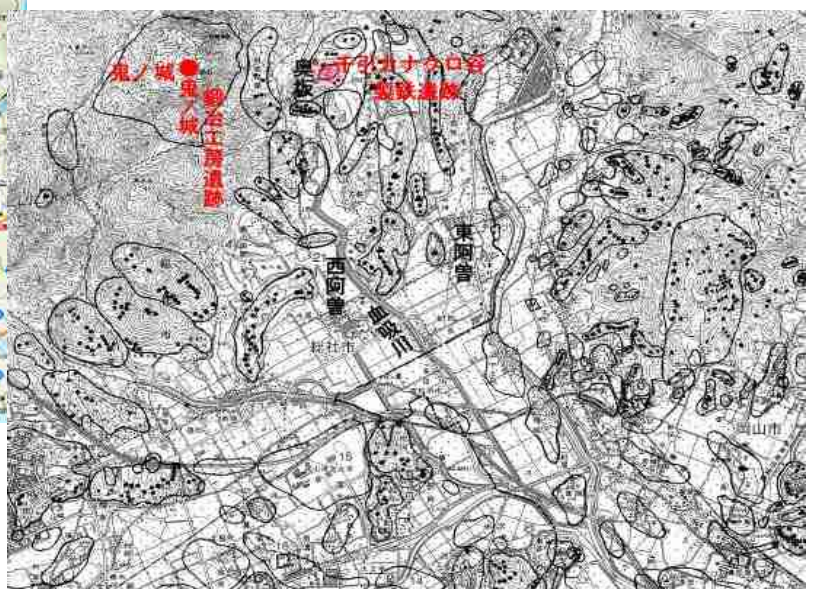
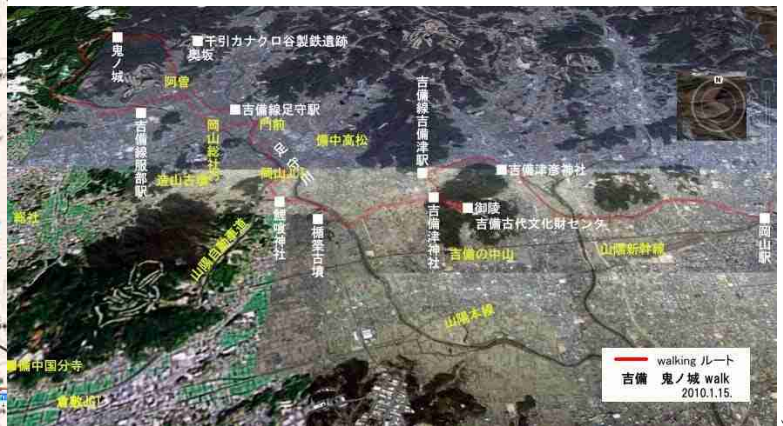


奥坂製鉄遺跡群 千引カナク口谷製鉄遺跡

「現在出土している日本最古後半の製鉄炉がある千引カナク口谷製鉄遺跡」



鬼ノ城 東門の上からみた奥坂 千引カナク口谷製鉄遺跡 (鬼ノ城 GC 内中央部の貯水池の下) 2010. 1. 15.



鬼ノ城の東山麓山裾に広がる製鉄遺跡群

〔右図は総社 阿曾周辺の遺跡地図〕

鬼ノ城直下の東山麓に広がる阿曾の郷は「真金吹く吉備」の古代吉備の大製鉄地帯の心臓部

その中心をなす「現在出土している日本最古 6世紀の製鉄炉がある千引カナク口谷製鉄遺跡」

是非一度足したためたかった古代の製鉄遺跡。何度か周辺を歩きましたが、鬼ノ城 GC の貯水池の下に眠っていると聞くだけで、正確な位置 どんな所に製鉄炉が合ったのか知りませんでした。今回 新たに発掘された7世紀の鍛冶工房跡のある鬼ノ城・東門の山上からその位置・地形を眺めることができました。

『千引カナク口谷製鉄遺跡』は、鬼ノ城の東山麓の幾つもの小さい谷間が続く奥坂の北に開ける小さな谷間に国内最古急の製

鉄炉が出土した製鉄遺跡(6世紀後半 - 7世紀初頭)で、炭焼き窯3基を含む製鉄炉4基の遺跡全体は、60㎡という当時としては大規模な構造を持つ。

この鬼ノ城直下の東山麓周辺ではこのほか、奥坂製鉄遺跡群と呼ばれるいくつもの古代製鉄遺跡が出土している。

古代「真金吹く吉備」と呼ばれた吉備の古代の大製鉄地帯の中心にある製鉄遺跡遺跡である。

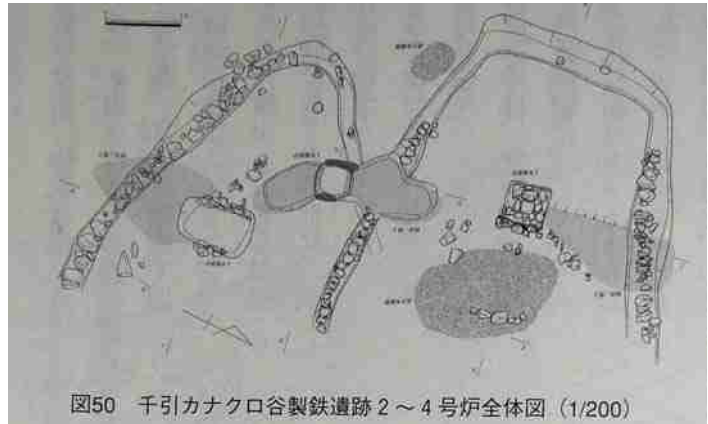
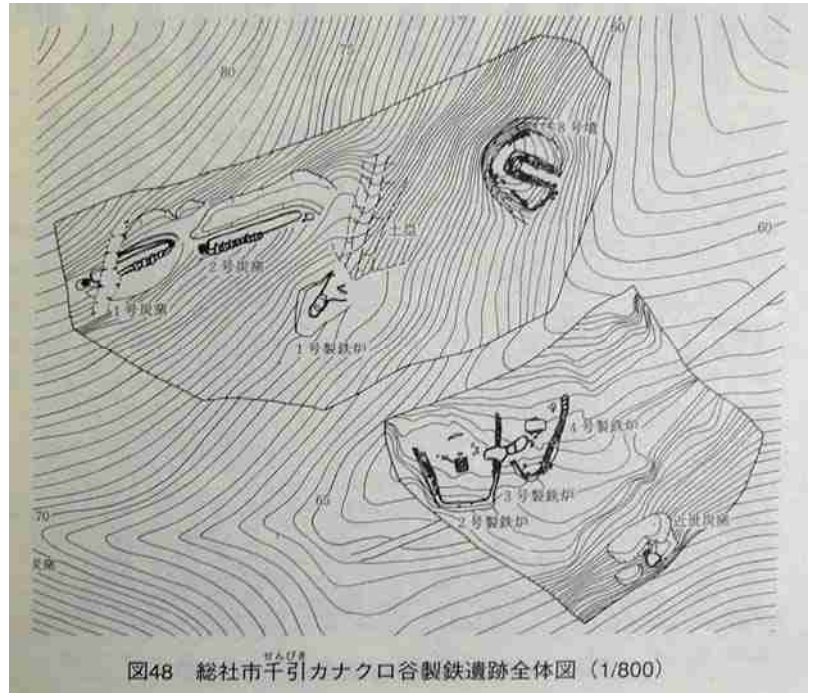
遺跡はゴルフ場建設に伴う調査で出土したが、現在「鬼ノ城GC」の中にある貯水池の下20mのところに埋め戻されて眠っているという。

千引カナクロ谷製鉄遺跡を含め、この周辺で出土した数多くの製鉄遺跡については光永真一氏著 吉備考古ライブラリー・10 「たたら製鉄」に詳細整理され、掲載されている。

光永真一氏著 吉備考古ライブラリー・10 「たたら製鉄」から千引カナクロ谷遺跡の概要・製鉄炉について解説記述されている部分を抜き出すと次のとおりである。

千引カナクロ谷遺跡は北東方面に開く小さな谷の奥まった南斜面裾に2~4号の3基の製鉄炉が重複して存在し、対する北斜面を5メートル上がって1号製鉄炉、その上方に2基の「ヤツメウナギ」(炭焼き窯の表現)があり、谷の西奥にもう一基の「ヤツメウナギ」が位置している。炉の操業順は4号炉がもっとも古く2号炉→1号炉→3号炉と考えられ、操業の終了は7世紀初頭前と考えられた。

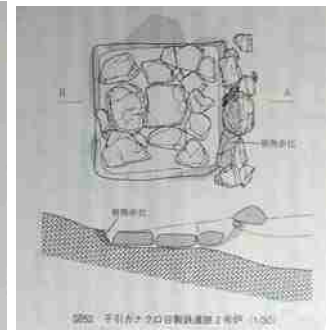
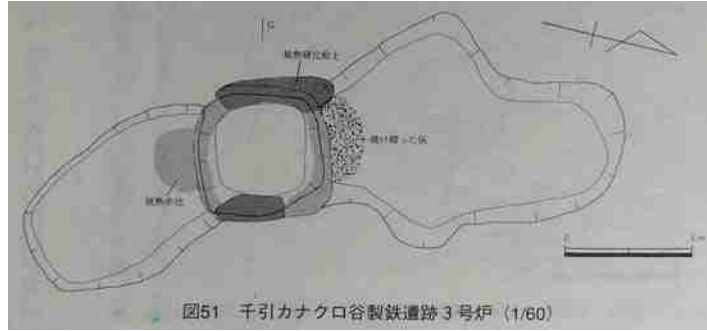
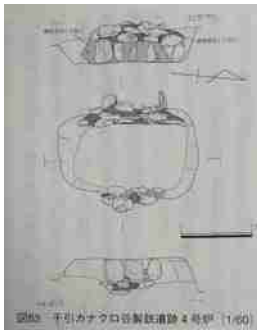
これまで知られていた7~8世紀代の炉跡と比べても一回り大きな地下構造に石を丁寧に使用する4号炉が国内最古級の製鉄炉と判明した。



千引かなくろ谷製鉄遺跡 左より 4→3→2号製鉄炉 光永真一 吉備考古ライブラリー・10 「たたら製鉄」より

国内最古級の4号製鉄炉は2号炉から7メートルほど離れて存在し、周りにU字1状に掘られた溝には暗渠状に石敷きが施されて、2号炉のそれと重なっている。地下構造となる土コウは205X135cmと大きく、深さ25~50cmを測る側壁のうちでも、長辺には粘土で目張りされた3段の石積み良好に残っていた。石積みは全体に熱影響をうけているが、より強い熱影響を示す2段目以上に補修が繰り返された跡がみられた。

2~4号炉一帯の作業面や排滓溜りからは鉄鉱石の小片が出土し、これが原料と考えられている。また2~4号炉一帯排滓溜りから須恵器が出土し、6世紀第Ⅲ四半期と判断された。(途中省略して整理抜粋させてもらった。)



千引カナクログ谷の製鉄炉 左より 4号 3号 2号製鉄炉 いずれも日本最古級の6世紀第三四半期の製鉄炉

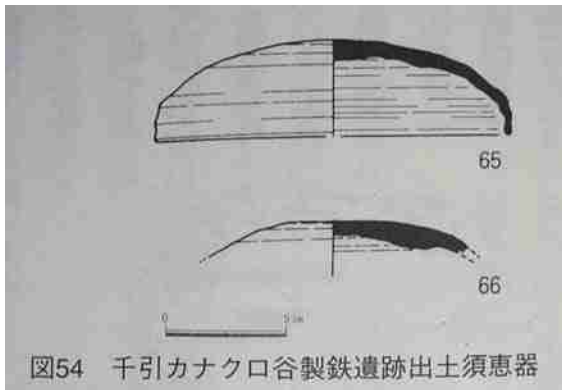


図54 千引カナクログ谷製鉄遺跡出土須恵器

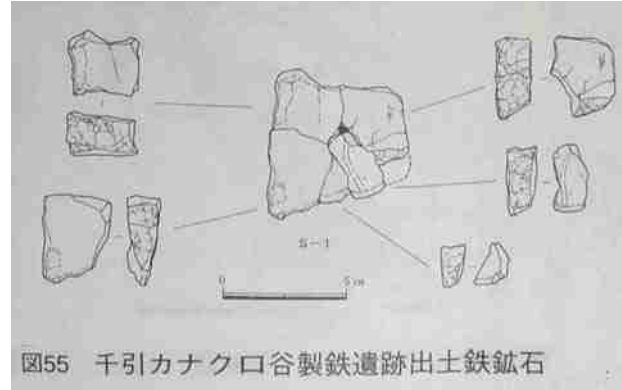
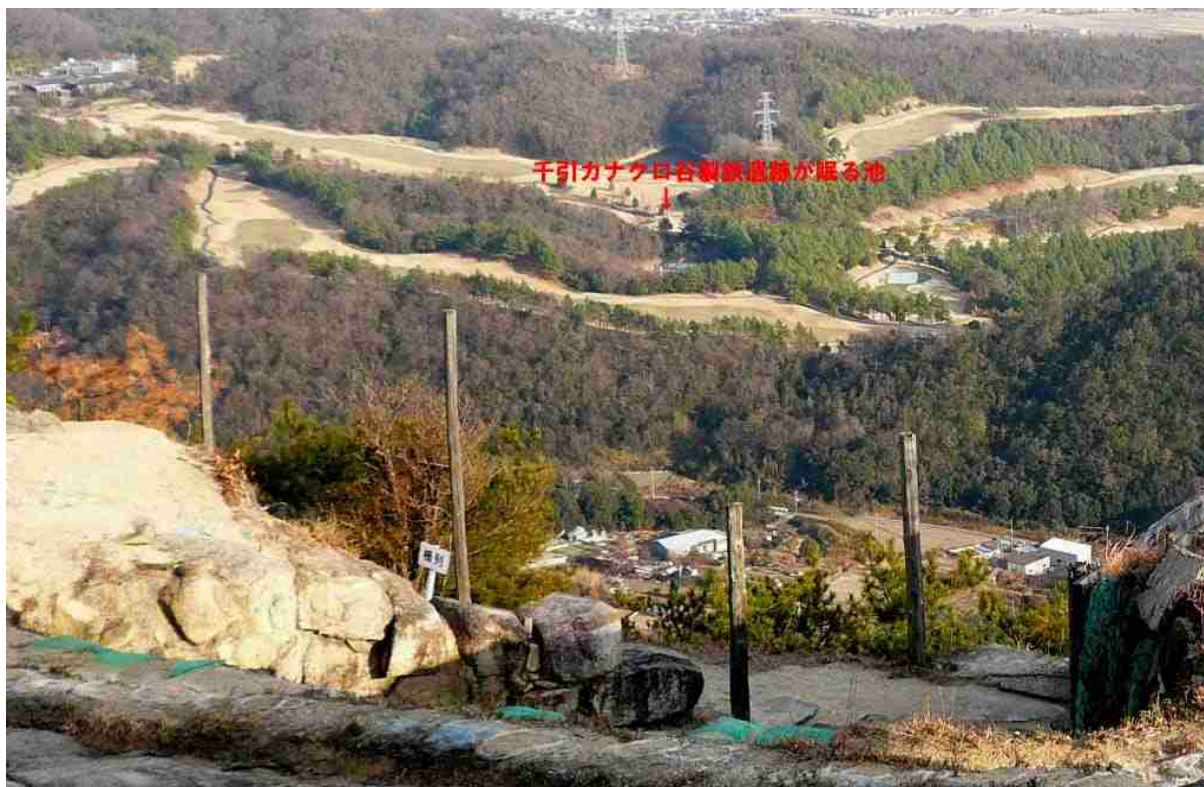


図55 千引カナクログ谷製鉄遺跡出土鉄鉱石

千引カナクログ谷製鉄遺跡より出土した須恵器と製鉄原料と見られる鉄鉱石片

ここまで 上記 光永真一著 吉備考古ライブラリー・10 「たたら製鉄」より 整理転記させていただきました。

この奥坂のすぐ東側にはが急峻な山肌を見せる鬼ノ城（鬼城山）がそびえている。この奥坂の製鉄遺跡群は鬼ノ城 GC 中にあるので、フリーに遺跡のある場所にはいけないが、この東阿曾・奥坂は鬼ノ城 東門の直下にあたり、この地域を鬼ノ城 東門から眼下に見下ろせる。また、急峻な崖道ではあるが、この東門と阿曾の郷との間には道がある。時代が少し下るが、7世紀 唐の侵攻に備えたこの山城が完成し、城の中でも武器の生産が行われた鍛冶工房が見つかったが、この阿曾・奥坂地区で生産された鉄と密接につながっていたと思われる。



鬼ノ城 東門 山上から見た東山麓 奥坂 千引カナクログ谷製鉄遺跡が眠るゴルフ

